

閉会にあたり  
日本モンゴル文学会 50年の歩み

芝山 豊

日本とモンゴルとの間に未だ国交がなかった、1970年の夏、当時、大阪市上本町にあった国立大阪外国語大学（現在の大阪大学外国語学部）に、モンゴル語学科の学生を中心とする「モンゴル研究会」が誕生しました。『モンゴル人民共和国 50年の歩み』という小冊子を外大祭で発行するための大学への登録が1971年であったことから、記録上、会の正式発足は1971年とされています。

そして、翌1972年、日本とモンゴルの国交が樹立された年、モンゴル研究会に「文学部会」が設けられ、外大祭参加の研究会小冊子に、『モンゴル現代文学史』を紹介しています。

50年前に生まれたモンゴル研究会文学部会こそが、現在の日本モンゴル文学会のルーツなのです。

モンゴル研究会文学部会の活動は、それまでモンゴル文学研究の主流であった古典文学の言語学的、文献学的研究ではなく、口承の文学とテキスト批判へ目配りしつつ、近現代のモンゴル文学を中心に据え、各国の文学作品や文学理論と関連づけて、自由に論じようと試みるものでした。

1973年にはメンバーが拡大し、1980年代後半まで活発な活動を続け、研究成果は、1975年創刊の『モンゴル研究』誌に次々に発表されました。

1990年代初頭には、学生メンバーのほとんどが大学・大学院を終えて社会に巣立ったこと、顧問的な立場の教員の異動にあたり、後任に文学を専門とする教員が補充されなかったという事情もあり、会員個々の研究は継続していたものの、定例会は一時休眠という時期がありました。そんな状況の中、モンゴル文学に強い関心を寄せる学生から、教員となっていた文学部会のメンバーに研究会を再開してほしいという声が寄せられました。

その声に応え、1995年、阪神淡路大震災での倒壊被害を免れたJR芦屋駅前のビルの喫茶室で、モンゴル研究会文学部会が再開されました。

ささやかな研究会への参加者が一人増え、二人増え、輪が広がっていくと、参加者の間には、会を「～大学」といった垣根を越えた、モンゴル文学を愛好するあらゆる人々が集い、語りあい、学びあう場にしたいとの思いが膨らみました。そして、1997年、国内外に散らばっている研究者を、興隆中のインターネットを活用して結集するという「日本モンゴル文学会」の構想が動きだしたのです。

1998年5月、長野市の清泉女学院の研究室を事務局として、日本モンゴル文学会のホームページが開設され、広く仲間を募ることになりました。

どこの国でも、東大対京大、レニングラード大対モスクワ大という類の対抗意識のようなものがあって、当時、モンゴルに関わる日本の研究機関の中にも、まだ、そうしたものの残

萍がありましたが、日本モンゴル文学会の、権威主義とは一線を画す、モンゴル文学の「コムンズ」創りの構想は、幸い多くの力強い賛同者を得ました。

1998 年度末に、長野市内で春季研究発表会を開催、1999 年の夏には滋賀県和辻浜で、2000 年春には浅間温泉で合宿形式の研究会を行い、21 世紀を迎えた 2001 年からは、ながらく日本のモンゴル文学研究の東西の拠点であった大阪外国語大学、東京外国語大学で、年に春秋 2 回交互に研究発表会を実施することとなりました。

こうした活動を積み上げて、文学部会設置から 30 年にあたる 2002 年に、日本モンゴル文学会の会員執筆による、現代モンゴル文学紹介の一般書籍出版計画が発議され、翌 2003 年秋、『モンゴル文学への誘い』（明石書店）として結実しました。（同書は出版 10 年目にあたる 2013 年に増訂され、オンデマンド版として刊行されています。）

モンゴル国、内モンゴル、ブリヤート、カルムイク等の研究者、研究機関とも緊密な関係をもちながら、国内外の研究者、文学者との交流を続け、2010 年には、機関誌『モンゴル文学』を刊行しました。創刊号の巻頭を飾ったルハグワスレン、チラージャブ両氏からの祝辞でも分かる通り、モンゴルの詩人、作家たちからも温かい支持と期待をいただきました。2012 年には、故タニ・ヒロユキさんが心血を注いだ『モンゴル文学 翻訳』が電子書籍として公開されました。

ルーツの発足以来、大阪、長野、東京、そして北海道へと事務拠点は移っていますが、本会は、常に持続可能な柔軟な運営方法を模索し、その営みを続けてきました。いまは、ウランバートル、フフホトでの国際学術会議を共催することもできるようになりました。

今後さらなる国際交流の拡大、研究の発展をめざして継続的な活動を続けるためには、ICT 環境の進化等、時代の変化や、来るべき世代交代にも備えなければなりません。

そこで、2020 年から、若手研究者中心の運営体制に刷新することになりました。会の代表は、大阪外国語大学のモンゴル研究会文学部会時代からのメンバーで、日本モンゴル文学会立ち上げの責任者であった芝山豊から、日本モンゴル文学会創設時より長年、会の運営を支えて下さった東京外国語大学の岡田和行会長へ交代し、副会長には、モンゴル国から D. ガルバータル・モンゴル国立大学教授、内モンゴル側から内モンゴル師範大学ドローンテンゲル（満全）教授、事務局長には、北海学園大学アイトル教授が就任されました。

この度、D. ガルバータルさんの御健康上の事情もあり、本日会の冒頭でご挨拶下さったバイガルサイハン教授が後任副会長就任をご快諾くださいました。

本日は、御発表下さった方々、役員の方々の皆さまをはじめ、運営準備でお骨おりにいただいた、阿比留美帆さん、深井啓さんら多くの会員の皆さまのおかげで、大変、充実した研究発表と意見交換を聞くことができ、ご参加の皆様と共に、日本モンゴル文学会のルーツ誕生から 50 年の節目を寿ぐことができたこと、とても嬉しく、ここから感謝申し上げます。

今回も、前回に続き、Covid-19 がもたらした遠隔会議形式となりました。これは、日本モンゴル文学会が当初から目指した情報技術の活用で遠く離れた人々を結ぶ、持続可能な交流の場の設定という趣旨に合うものでもあります。これからも、対面と遠隔のハイブリッ

ドな会議形式によって、物理的な距離を超えて、諸地域に暮らす仲間がひとつに結ばれていくことでしょう。

文学は、嘗て、度々、プロパガンダの道具となってきました。しかし、また、文学は、いつの時代にも、不正や欺瞞を暴き、人々に進むべき道を指し示すものでもありました。

文学は、何より、人生は美しく、生きるに値するものだということを教えてくれます。

その文学の力が、パンデミックの恐怖や、暴力のみに解決を求める偏狭な思想の呪縛からわたしたちを解き放ち、真に正義と平和が抱きあう美しい世界の実現に資することを祈りつつ、閉会のご挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。